

## 昭和60年度共通第1次学力試験の 実施結果

昭和60年度共通第1次学力試験は、各国公立大学及び産業医科大学と大学入試センターとの緊密な連携のもとに、昭和60年1月26日(土)、27日(日)の両日、全国284会場で、336,357人の志願者について一斉に行われた。

今回の試験は、昭和57年度から実施された高等学校の新教育課程を履修した者を対象とし、「現代社会」、「理科Ⅰ」を含めた新しい教科・科目により実施されたが、幸い、降雪による交通機関等の混乱もなく、当初の計画どおり実施され、無事終了した。

### 1 実施方法等の決定・発表

昭和60年度共通第1次学力試験の実施に当たっては、昭和57年度から実施された高等学校学習指導要領に基づく出題教科・科目によることや前年度の試験の終了後寄せられた要望・意見等を参考とし、過去6回の実施の経験を踏まえて検討した結果、試験期日の繰り下げを行うこととし、このことに伴う雪害対策及び再試験防止策などを考慮し、昭和59年6月20日、「昭和60年度大学入学選抜共通第1次学力試験実

施要項」を決定した。また、この実施要項に基づいた「受験案内」を作成し、志願者や高等学校関係者に交付した。各大学の入学試験実施担当者に対しては、7・8月及び12月の2回にわたり入試担当者会議を開催し、試験の実施、業務の処理日程及び各種の事故対策等の細部にわたる説明・協議を行い、実施に万全を期すとともに、高等学校、教育委員会、PTA等関係者に対しては、8月に共通第1次学力試験の説明協議会を全国7地区で開催し、試験の実施に関する諸事項について説明を行うとともに、協議の機会を持ち、その周知を図った。

### 2 志願状況等

#### (1) 志願者数

出願受付は、昭和59年11月1日から10日までの間、高等学校卒業見込みの者は在学する高等学校を経由して、高等学校を卒業した者等については直接大学入試センターへ郵送することにより行われ、志願者数は、336,357人となり、前年度より24,489人減少した。また、高等学校卒業見込者(現役)の志



願率も15.1%と前年度より0.4%低下した。これは、高等学校卒業見込者が前年度より約11万人減少したことが大きく影響したものである。

## (2) 大学・学部別志望状況

大学・学部別の平均倍率は、志願者が減少したことに反映し、前年度より0.1倍減少の3.5倍となった。学部系統別でみると、「農水産系」で増加し、「人文・社会系」、「理工系」、「医・歯系」、「薬系」、「教員養成系」がそれぞれ減少した。

## (3) 試験場

志願者数の確定後、各国立大学は公立大学と協力して志願者数に応じた試験場を設定した。試験場は、各大学の施設を当てることを原則としているが、収容能力を超える大学については、高等学校等を借用し、全国で284会場に及んだ。

## (4) 受験票等の発行

受験票等の志願者への発送は、12月12日から20日までの間に行った。受験票等は、高等学校等卒業見込者（通信制課程を除く。）については在学する高等学校等を経由し、本人に送付したが、その後、未着・紛失・破損等による再発行申請が約1,200件あり、直ちにこれらに応じた。

## 3 共通第1次学力試験の実施

### (1) 試験の実施

共通第1次学力試験の本試験は、1月26日、27日に全国284会場で一斉に行われた。また、病気等の理由により本試験を受験できなかった者を対象にする追試験は、2月2日、3日に東京商船大学及び神戸大学の2会場で行われた。

本試験及び追試験の全教科を受験した者は、321,126人で、このうち追試験の受験者は、139人であった。また、欠席者数は、15,231人、欠席率4.53%で、前年度より0.85%減となった。内訳でみると、2浪以上が12.6%と最も高く、現役3.7%、1浪2.6%となっている。学部系統別では、「医・歯系」8.1%、「人文・社会系」が5.2%と高い率を示しており、現浪別、学部系統別とも前年度とほぼ同じ傾向となった。

身体に障害のある者226人（出願受付時160人）については、障害の種類・程度に応じ、受験の際、特別の措置がとられた。本年度から新たに実施した「チェックによる解答」は33人であった。

### (2) 試験問題

共通第1次学力試験の試験問題は、「高等学校段階における一般的・基礎的な学習の達成度を判定すること」を

目的にしており、今回の試験問題の内容については、広く一般から意見が寄せられているが、全般的に適切な出題であるという評価を得ている。

なお、大学入試センターでは、試験終了後から高等学校側の意見を聞くなど、分析・研究を行っているところであり、今後の問題作成に反映させることとしている。

## 4 共通第1次学力試験の結果

### (1) 答案の採点

共通第1次学力試験の志願者336,357人のうち、所定の全教科・科目を受験した321,126人の答案約160万枚は、各国公立大学で取りまとめられ、大学入試センターへ返送された。大学入試センターでは、これらを1月28日から光学式マーク読取装置で読み取り、電子計算機により採点した。

受験番号欄のマークもれ等は、「受験案内」に「試験問題冊子の注意事項（抜粋）及び解答用紙の様式（見本）」を掲載した上、解答用紙の選択科目欄等の改善を図ったことなどにより199件と前年度に比べ大幅に減少した。

### (2) 実施結果

本試験は、試験期日の繰り下げに伴い、第2次試験の出願前に平均点等の最終発表が不可能となったため、2月

6日に全教科及び各教科・科目の中間結果に基づく全国平均点の予測値を中間発表した。また、本試験の所定の全教科・科目を受験した320,987人の最終結果をまとめた総得点、科目別平均点、標準偏差、最高点、最低点及び総得点の得点分布などは、2月25日に報道機関を通じて発表した。

全教科の平均点は、627.03点で前年度より18.26点高い、過去3番目に高い点数となった。平均点が6割を下回らないとする目標は十分達成できたと考えている。

教科別にみると、「国語」(138.13点)14.53点、「数学」(116.23点)7.92点、「外国語」(118.21点)4.75点と前年度を上回ったが、「理科」(128.06点)8.87点、「社会」(126.40点)0.06点それぞれ低下した。

また、科目間の平均点の差を縮小することについては、かねてからの懸案であり、今回は「社会」で最高の「地理」(67.78点)と最低の「日本史」(60.61点)との差が7.17点となり、前年度の約13点に比べて、科目間の差が縮小した。一方、「理科」では、最高の「物理」(65.56点)と最低の「地学」(53.77点)とは11.79点(必修科目である「理科Ⅰ」を除く。)の差となった。この点について、その内容を分析したところ、「理科」の科目間の点差は、受験者集団の学力差に起因しているものであることが判



った。

試験問題の作成に当たっては、試験問題の作成段階から、過去の実施結果を研究分析するほか、試験問題そのものの工夫・改善に努めているが、今後できる限り差の生じないように調和のとれた問題を作成する努力をしたい。

## 5 成績の各大学への提供

大学入試センターでは、各国公立大学及び産業医科大学からの成績の請求を受けて、それぞれの大学の入学志願者の総得点、教科・科目別の得点等について、資料の提供を行った。